リビングマガジン福生 1

福祉・ボランティア編

高野実さん

高野実さんは、東大和病院に勤務し患者のリハビリテーションの介護や指導に当たるかたわら、市内の手話サークル「福手の会」代表として37名のメンバーをまとめ、幅広くかつ積極的に活動しています。

「福手の会」は健聴者、耳の不自由な人双方の集まりで、週に一度の勉強会のほか、ほぼ月に一回、一泊研修会、ボーリング大会などの行事を行い、それらの企画・運営を通じてメンバー相互のコミュニケーションを図っています。

「手話では抽象的な表現が伝わりにくいことなどもあって、聞こえる人たちの文化と聞こえない人たちの文化の間には微妙な差があるんです。そのため、時には運営面で意見が分かれることもありますね。聞こえない人たちの文化をどう理解していくかが一番難しいところです」と語る高野さん。聞こえないことを、ひとつの文化として捉える視点がとても新鮮です。

「聞こえない人たちの指導のおかげで手話というひとつの言語を私たちは獲得させていただきました。今度は彼らにどういう形で還元していくかが課題。私が手話通訳をしているのもその一環としてなのです」。

高野さんの趣味は落語鑑賞。自分の目の前にある空間を使って表現していく点は手話に通じるところもあるとか。

「いつか機会があれば落語を手話で表現することにも取り組んでみたい。そして、細く長くずっと手話に携わっていきたいですね」と語る穏やかな笑顔が印象的でした。

青木布美枝さん

学校帰りに見かけた小さなポスターが、青木布美枝さんを公民館の障害者青年学級『にじのはらっぱ』のボランティアにかり立てるきっかけに。

「高校1年間、やりたいことがみつかりませんでした。勉強は頑張ったことがストレートに評価されるものではないし、もっと自分の納得できるようなことを探していたんです」。

ふだんは粘土や空き缶で作品をつくるなどの室内活動の補助が主体ですが、山登りをしたり、社会見学で動物園にでかけるなどの野外活動では日常生活全般にわたる手助けが必要となります。

ボランティアのスタッフのなかでは最年少。しかも障害のある人も青木さんより年上です。「大変でしょう」と友達からよくいわれるそうです。「大変であるとは少しも感じません。学校の友達と同じように接しているので、私自身とても楽しいんです。たとえ言葉に表現されなくても、心が通じているのがわかるときがあるんです」。気負いのないもの静かな口調には、深い思いやりが感じられます。

今までで一番嬉しかったことは、誰にも心を開かなかった男の子が、ハイキングで青木さんにお弁当の柿をくれたこと。そして、学校のスピーチの時間に『にじのはらっぱ』の活動を話したら、友達が福祉に興味をもってくれたり、障害をもつ人への考え方が変わったと言ってくれたことだそうです。

「仕事をするようになってもずっと続けていきたい。そしてもっと福生の健常者の人に活動を知ってもらいたいです」。目を輝かせて語る青木さんに思わずエールを送らずにはいられません。

鯉淵スマ子さん

毎週水曜日、老人家庭に給食を届ける配食ボランティアを行っている鯉淵スマ子さんは、この制度ができた当初から約10年にわたって取り組んでいます。「自分の老後を考える勉強になれば」と、市が主催する老人福祉の講座に参加した際、給食制度を考えているので協力してもらえないかという要請を受けたのがきっかけでした。

「10年の間には老人ホームに入られたり亡くなられた方もいらっしゃいますが、お年寄りが私の訪問を楽しみに待っててくださるのがなによりの励みになります。こちらが教えられることもたくさんありますし……」。

鯉淵さんが現在担当しているのは、90歳のおばあちゃん、76歳と73歳のご夫婦の2世帯。お昼まえに近所の福祉会館に行って、お弁当を受け取り、自転車で配っています。

「配食ボランティアの役割は、食事を届けると同時に安否を確かめるということでもあります。ボランティアという立場だから、相手のお年寄りも気軽に話せるようです。利用者のなかには、家事雑用を頼むことなどもありましたが、どこまでお手伝いするべきなのかという線引きが難しいですね。私はつかず離れず、自分に無理のない範囲でやってきたので長続きできたのだと思います」。

鯉淵さんの好きな言葉は“お互い様”。「老いは人ごとではなく必ず自分にも回ってくるもの、そのときは人様にも気軽に助けていただきたい」。ごく自然にそう考えられるようになったのも、この活動のおかげだといいます。